

(前略)

「松永久秀は武略ぶりやくに優れ、かつ聡明であるというが、間違いなく心がよこしまな人間である。自分の利益のために謀略をめぐらす者が、その威を積み重ねて国家を乱すことは、手のひら返しを超えている。そのような悪さをする者をどのように扱えばよいのか」と信長卿が仰せになると、佐久間のぶ盛は「それは久秀が暗君あんくんに仕えた時のこととごさいます。久秀が赦免しゃめんされれば、天下はすぐに静かになって落ち着くでしょう」と諫め申したところ、「それならば、お前がともかく処理せよ」と信長卿は仰せられ、信盛は松永父子の降参のことを調整し、まず多聞山城たもんやまを受け取り、松永父子は元龜四年正月十日（本当は天正二年正月十日）に岐阜へ向かいお礼を申し、不動国行ふどうくにゆきの刀と薬研藤四郎やげんとうしろうの脇差わきざしなどを進上した。そして、多聞山城には山岡対馬守つしまのかみを置いた。

(後略)